をして先づ當代の天皇に對する印象を深からしむるが如き他の類似書に觀ざる編者の用意の存するものあり。思ふに古來我國民性の間に新奇を逐うて過去を顯みざる習性あるは古語拾遺の著者をして書契ありてより以來古へを談ずることを好まず浮華競ひ興りて還つて舊老を嗤るこいはしめたり、而かもよく國體を辨へ擧國一致外敵に當りて國基の安泰を保ち得たりし所以のものは國民の大多數が建國の由來より國史の精華につきて正確なる概念を有せしに由るものにして、其知識の源泉は實に座右一部の年代記に仰げるのみ、年代記の習得は決して輕視すべきにあらざるなり。今や昭和の聖代に當り國民はもとより年表的智識を以て甘んずべからず、故に本書は御歷代要記の記事を精選して內容の充實を期すると共に、憲法皇室典範皇室令其他の國民必須の要典を具載して時代に順應せんことを圖れり、斯くして成れる本書は現代國民の國史に關する知識の最少限度なり。國民にして若し日常少閑を割きて本書の記事に寓目せんか、其思想行動に於て庶幾くは些の遺憾なきを得べけん、而して本書の編者も亦將來其版を重ぬる每に增補修正を加へて眞に每戶に備ふべき國民必讀の寶庫たらんことを期せざるべからず。」云々。裝頂頗る華美である。(四六倍判八六八頁、定價二五、〇〇、東京大日本皇紀刊行會)〔以上柴田〕

◉森田節齋と姫路　武岡　豐太講述

本書は節齋が萬延元年姫路に赴き約五十日間滯在して藩校に於て講義を爲したが、其間氣節文章を以て士氣を皷舞し延いて明治維新に對し大なる貢獻を爲した事を述べたもので、去る大正十五年、述者が兵庫縣立姫路高等女學校に於て講演された際の速記錄を訂補したものに、史料の一部を添載したものである。此の研究前後約三十年に涉つた由であるが、其の熱心の程眞に敬服に堪へない。維新史研究者の參考とすべき書物である。(菊判一一六頁、神戶市武岡豐太發行、非賣品)

◉茶　道　高橋　龍雄著

茶事は古來遊戲として取扱はれ、而も奢侈的亡國的な

ものと見做されてゐた。故に未だ茶道を學問的に研究したものは殆んど無かつたと云つてよい。併し茶道は喫茶喫飯、飲酒の禮を行ふに當り、あらゆる道具を使用する其の道具の綜合藝術であつて、確かに學問の對象として研究する價値があるものであるこの見解から、各方面より歴史的材料を集め、加ふるに著者の名器に對する該博なる知見を活用して、茶道、名物茶器の由來等を史學的藝術的に研究しやうと試みたものが本書である。其の目次の大要は總說、茶の歴史、茶道の成立、英雄の茶、茶會、懷石、茶室と茶庭、掛物、花入、茶入、茶碗、拜見を請ふ茶器、茶人系譜及び流派、結論、とし、多數の口繪及び挿畫を附し、最後に一般索引及び引用書索引を添へてある。叙述の體は極めて通俗的、解說的であつて、而も隨所に茶の趣味を現はさうと勉めてある。茶道に趣味を有する人士の一讀を要するものである。(四六判三四六頁、東京大岡山書店發行、價三、八〇)〔以上松野〕

◎東洋史概說　松井等著

本書は去る四月公にせられ著者が多年の間幾多の大學專門學校に於て講じ又講じつゝある東洋史の講案を整理したものである。自ら序に於て、東洋史に關する新しい見解と細かな研究とが次々に現はれて來るにつけても、自分の書き溜めた原稿がひどく見劣りして之れを公にするのが如何にも氣恥しく思はれると述べてゐるが、本書の內容をうかゞへば如何に著者が是等の點に周密な注意を拂つて學界に現はるゝ新知識をとり入れ之を適當に內容に織込まれたかゞ首肯される。歴史が單なる事實に關する記述に止る時代は過ぎて思想的根據の上に立脚して之を把握せんとするは近來の顯著な事實であり、現在に於ては東洋史のみ獨り取り殘された如き觀がないでもない。之は一つには東洋史の中心をなす支那そのものゝ歴史が甚だ斷片的で纒め難い點にも存する事と思はれる。歴史は過去から現在への事象の變移を其流動の姿について說明すべきもので其事は著者の云ふが如く今日の東洋史に於ては至難の業であるが然し乍ら將來東洋史家の最大任務はこゝにあると思はれる。此點について本書は著